

# 那珂川町図書館

## オススメの1冊

『世界のへんな肉』  
白石 あづさ／著 新潮社 【596.3 シラ】

旅行の楽しみと言えば、旅先で食べる料理もそのひとつです。中には海外旅行先で、日ごろ口にしたことのない珍しい動物のお肉を食べたことがある方もいらっしゃるのではないのでしょうか。本書の著者である、白石あづさ氏は20代の頃に約3年間かけて世界一周をし、世界のいろいろなところで珍しい動物のお肉を食べてきたそうです。美味しかったものから、そうでなかったものまで……。バッファローやワニなどといった肉食獣もこわい生き物ですが、その肉食獣でさえ、食べる国があります。そう考えると、生き物の中で一番こわいのは人間だと改めて思いました。

私は、ウニやらイクラなどといったいわゆる珍味があまり好きではありませんが、昔、友達から“食用ガエルは鶏肉の味がしてとても美味しかった”と聞いたことがあったので私も人生の中で一度くらいは珍しい動物のお肉を食べてみたいと思い本書を手に入れました。

ご存知の方もいらっしゃると思いますがインドでは、牛は“神様の乗り物”であり、神様の仲間として信じられているため、インドで牛を食べることはタブーとされています。日本で牛と言ったら白黒のまだら模様を真っ先に思い出しますが、この“神様の乗り物”言われている牛は白くてとても美しいので納得できます。けれども、なんとそのインドには牛カレー屋が存在し、しかも大繁盛だそうです。なぜだかおわかりでしょうか。実は、バッファロー（水牛）は食べて良いそうです。しかしこの肉、まるでゴムのように弾力があり噛んでも、噛んでも噛みきれないほどすごく硬くてあまり美味しくないそうです。見た目からして硬そうで美味しくなさそうに見えますが、インドでは牛といえばバッファロー（水牛）しか食すことができないのでそんなことは関係ないのかもしれないね。

本書は、ユーラシア篇・アフリカ篇・中南米篇・ヨーロッパ篇・アジア編・日本篇に分けて紹介されており、また著者の直筆のイラストとともに動物との触れ合い、その肉を食べるまでの話や“世界のへんな肉地図”も掲載されています。

世界各国を旅行されて気づかれたことは、「世界では国や宗教によって、食べられる肉と食べられない肉が決まっている、ということ。「おいしいのに食べられないなんて気の毒だなあ」と思いつつも、その国の「肉文化」から人々の生活や考え方が垣間見える旅のおもしろさを、インドの水牛が最初に教えてくれたのだった」と著者である白石あづさ氏は綴られています。